朝日遺跡出土の外来系土器について　—1—

石　黒　立　人

Ⅰ

朝日遺跡では各種の外来系土器が出土している。外来系土器は西日本、東日本の広範囲に係累を辿ることができる。しかし、搬入品と在地品の識別に関しては未だ試行中であり、確定したものとはなっていない。この点は将来の課題として持ち越さざるを得ない。

外来系土器の出土頻度には時期的な変動がある。Ⅲ期までは東西とも存在するのに対し、Ⅳ期以降は西日本系に占められ東日本系はほとんどみられなくなるという傾向を見せる。詳しい比率を出すための統計的処理は実施していないので定量比的な検討は行い得ないが、とりあえず目立つ資料を抽出し、本稿以降シリーズで紹介することでカタログ作成を進めたいと思う。

本稿では、Ⅱ、Ⅲ期の東日本系土器を重点的に取り上げた。それらは「東日本系」という言葉からくるイメージと異なり、恐らく伊勢湾周辺地域で製作されたものがほとんどと思われる。あるいは、朝日遺跡で製作されたものが含まれているかもしれない。

Ⅱ

Ⅱ期に属す東日本系土器は、条痕文系土器、平行線文（半截竹管文）系土器、沈線文系土器（縄文充塡、擬縄文充塡を含む）に類別する。

条痕文系土器　器形のわかるものは『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題　資料編Ⅰ』（愛知考古学談話会　1985）に準拠するので、以下に調整・施文に関する分類を原体に則して提示する。

a類　二枚貝条痕（文）のみ　第1図1・2・7・9・12
b類　二枚貝条痕（文）＋平行線（半截竹管）文　第1図3。
c類　二枚貝条痕（文）＋篦描沈線文　第1図4・8。
d類　櫛（Ⅱ種B）条痕（文）＋平行線文　第1図5。

平行線（半截竹管）文系土器　器形的には条痕文系土器に類似するものもあるが、施文技法の異なることをもって区分する。とはいえ、破片資料中には条痕文系土器b類と区分

の難しい例もある。特に壺の場合、体部上半にナデ調整ののち平行線文のみを施し、体部下半に二枚貝条痕のみを施す例もあり、〈折衷系〉を含めての厳密な区分には困難を伴う。第1図6。

沈線文系土器　沈刻文を主文様とする一群である。今回は紹介しなかったが、小形壺、浅鉢からなる。小形壺では充填縄文を加えるものもある。（→大地型壺）。

以上の類別は、文様表出手法を規準としている。つまり調整・施文の未分化・分化という点を重視したのであるが、条痕文系土器と平行線文系土器との折衷型の位置づけや、沈線文系土器における縄文の評価など問題は多い。また条痕文系土器と櫛描文系土器との関係においても、全く無関係として区分することのできない部分もあり、この点はⅢ期での類別を難しいものにしている。

Ⅲ

Ⅲ期に属す東日本系土器は続条痕文系土器と櫛描文系土器に類別する。

続条痕文系土器　器形全体のわかる例は少ない。壺の基本形はⅡ期条痕文系土器を継承するが、そのうち肩に段をもつ長頸壺形土器の発達が著しい。

a類　条痕（文）主体で、原体には二枚貝、櫛（Ⅱ種B）がある。

b類　条痕（二枚貝・櫛Ⅱ種B）＋篦描沈線文または平行線文。篦描沈線文・平行線文が従属的施文であるb_1と、篦描沈線文が主体的施文となっているb_2とに区分できる。

篦描沈線文のb_1・b_2に共通する用法は、Ⅲ期に始まる横位区画を軸とする施文の多段化に対応した区画文に代表される。b_1の場合には区画文としての篦描沈線文の欠落する例がある。

体部上半施文部と体部下半の条痕部との境界には複合鋸歯文を配置する例が目立つ。この点は別稿で触れたとおりである。第3図1・4・5・6・13。

c類　篦描沈線文。条痕は欠落するが、条痕文系土器との系譜関係を重視して含めることにした。第2図4、第3図12。

x類　二枚貝背面押圧による擬縄文充填を特徴とする一群である。全形のわかる例は未確認である。続条痕文系土器に含めるべきか判断に迷うが、a類・b類に二枚貝使用例のあることを重視し、とりあえずここに含めておく。第4図1・2・3

櫛描文系土器　櫛描文のみという例はない。すべて篦櫛併用である。この点はⅢ期に属す土器全般の特徴でもある。特に篦描沈線は横位区画文としての用法が通例である。

櫛描文は、いささか感覚的な区分になるが、太描と細描に区分できる。太描は二枚貝や太目の枝茎を用いた櫛、細描は細目の枝茎を用いた櫛である。太描は条痕文に共通する原体を使用している。太描：第３図９。細描第４図５・６。

Ⅳ

今回紹介した土器群をめぐる若干の問題についてコメントを加える。

１． Ⅱ期条痕文系土器に特徴的なハネアゲ文は３つに分類できる。

A類〔　〕　波状文の施文動作で行うハネアゲ文典型。

B類〔　〕　下端のハネアゲ部分が斜下方へ逃げる。

C類〔　〕　A・B両類が上から下への動作を基本としていたのと異なり、下から上への動作による。縦位・斜位がある。

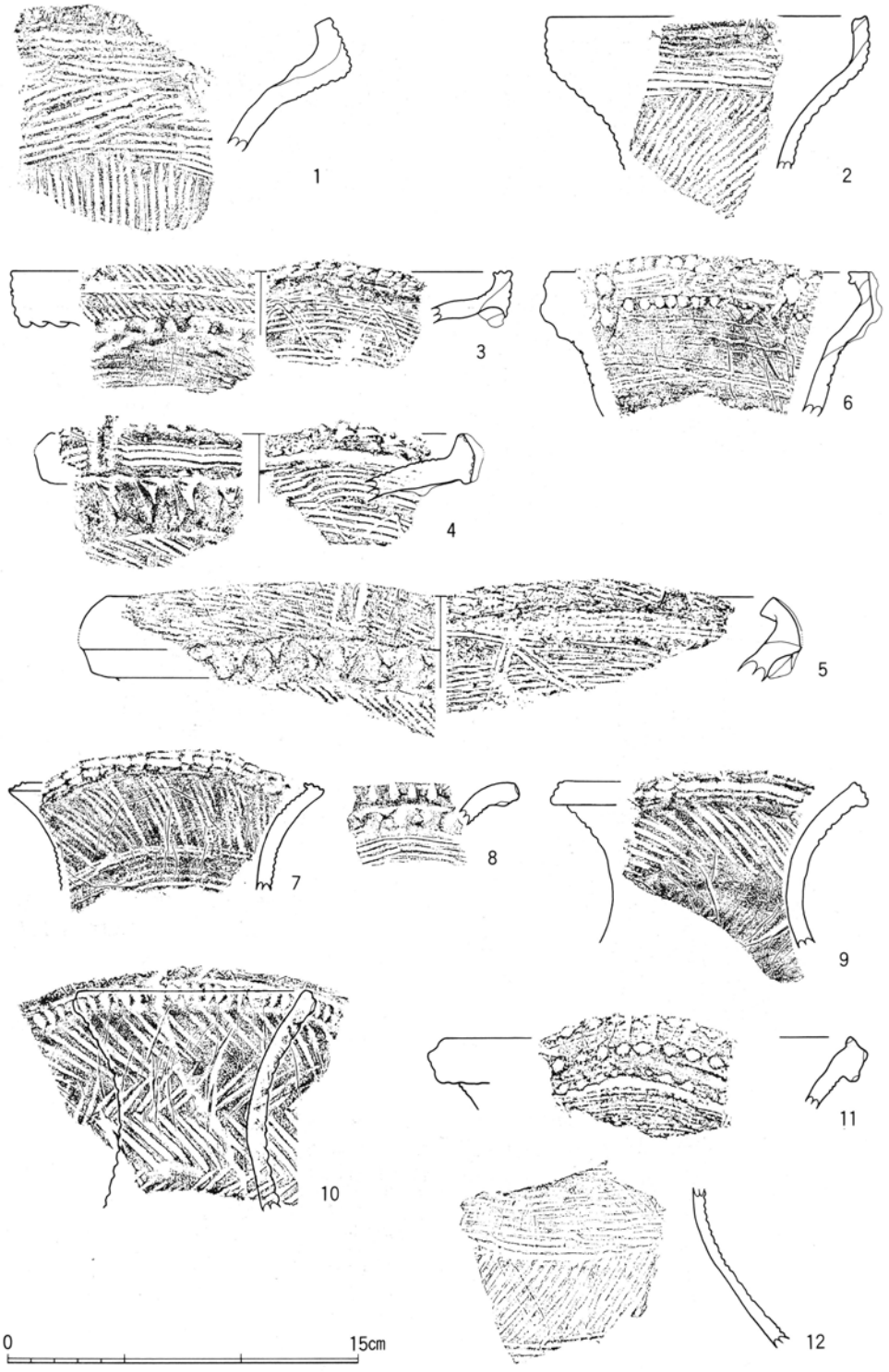
A類はⅡ期に限定される。壺の場合口縁部外面の貼付突帯はもつものもたないものの両者があり、比率は前者が高い。B・C両類になるとA類に比べ突帯欠落率は高くなる。C類はⅢ期にも存在する。つまり、Ⅱ期内でA類からB類へと変化し、B類に併行して始まったC類はⅢ期へ継承されるという図式に整理することができる。

２． 条痕文系土器―調整・施文ｂ類の分布は知多半島と尾張低地部で知られているにすぎないが、美濃に同C類の存在することをみれば美濃も分布圏となる可能性はある。遠江の丸子式にみられる波状平行線文や口唇部圧痕文は三河を飛び越した連繋を示唆するものであろうか。

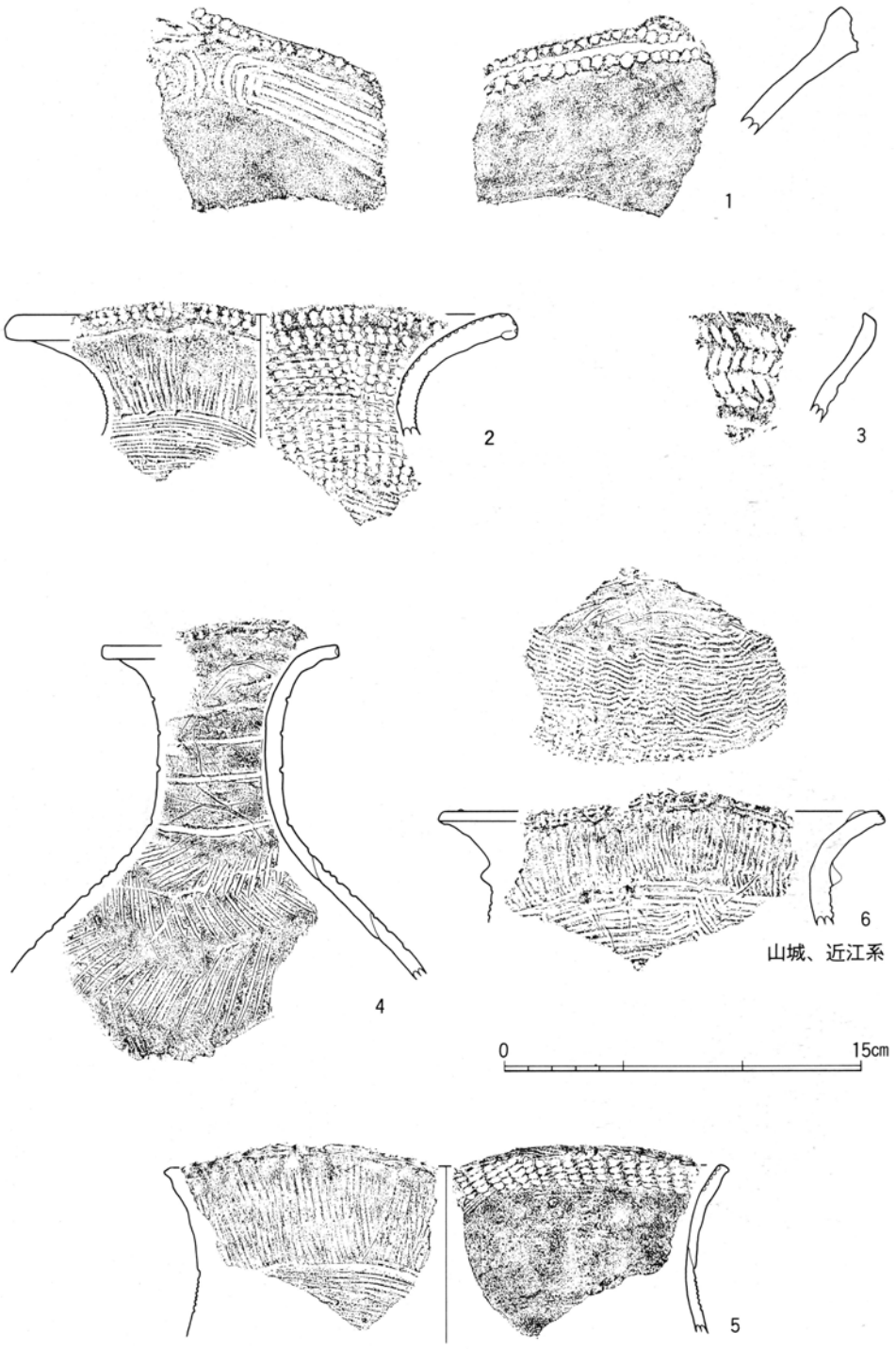
３． 条痕文系土器ｂ類や平行線（半截竹管）文系土器はⅢ期にはほとんど見られなくなるが、それに代わって続条痕文系土器b_2類や同ｃ類の優勢になる点は平行線（半截竹管）文から沈線文への転換を意味するのであろうか。

４． 調整・施文への二枚貝使用は、Ⅱ期は朝日式壺・甕、尾張・美濃の条痕文系土器に優勢である。Ⅲ期続条痕文系土器や櫛描文系土器の一部にある二枚貝使用例はⅡ期を継承するものとすれば、尾張、美濃という近接地での製作を想定できるのであり、「東日本系」といえども決して遠隔地製作ばかりではないことになる。この点に関しては別稿でも触れているように、地域差の歴史性として「地域性」一般とは区別されねばならない。

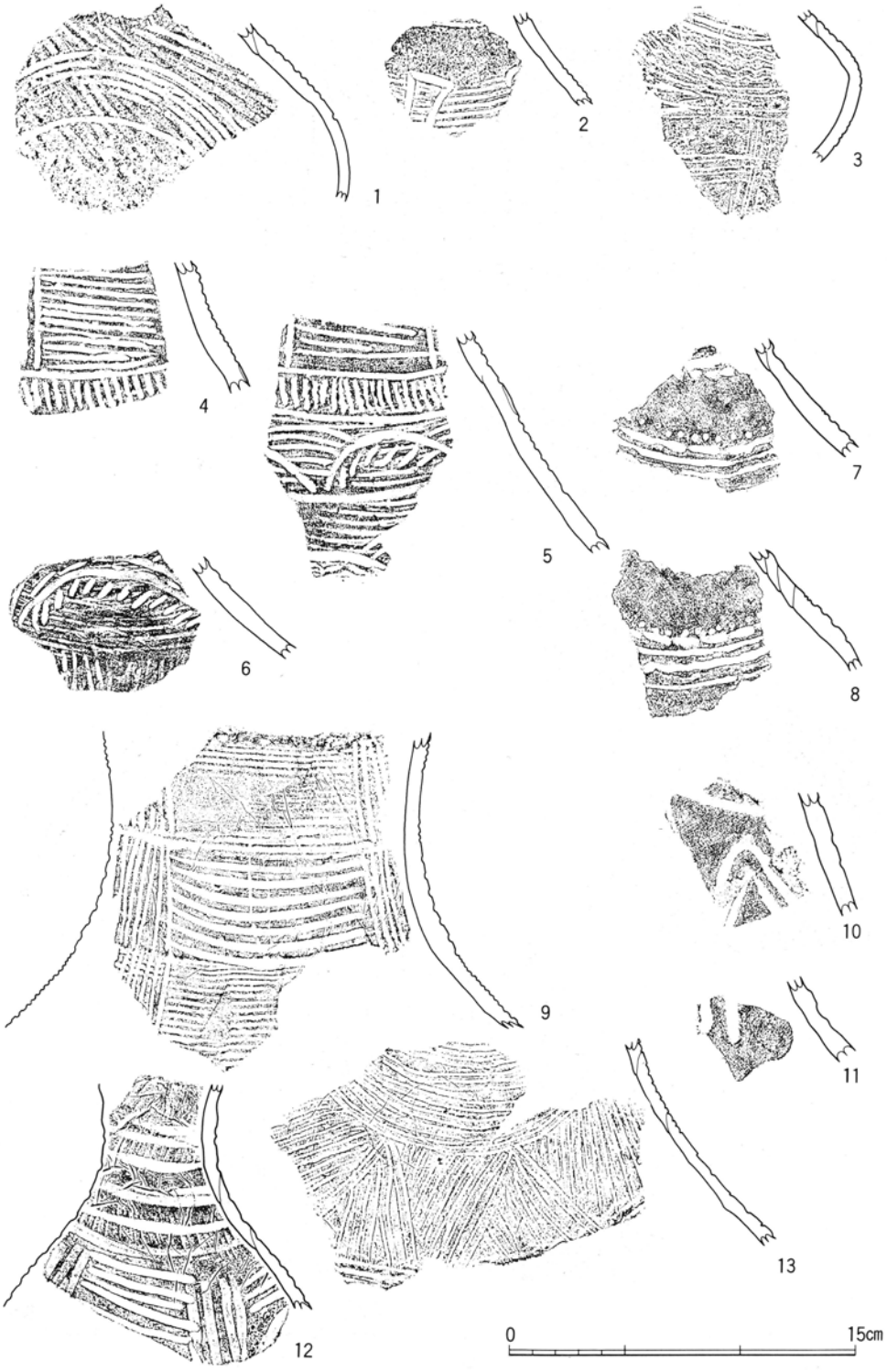
（つづく）



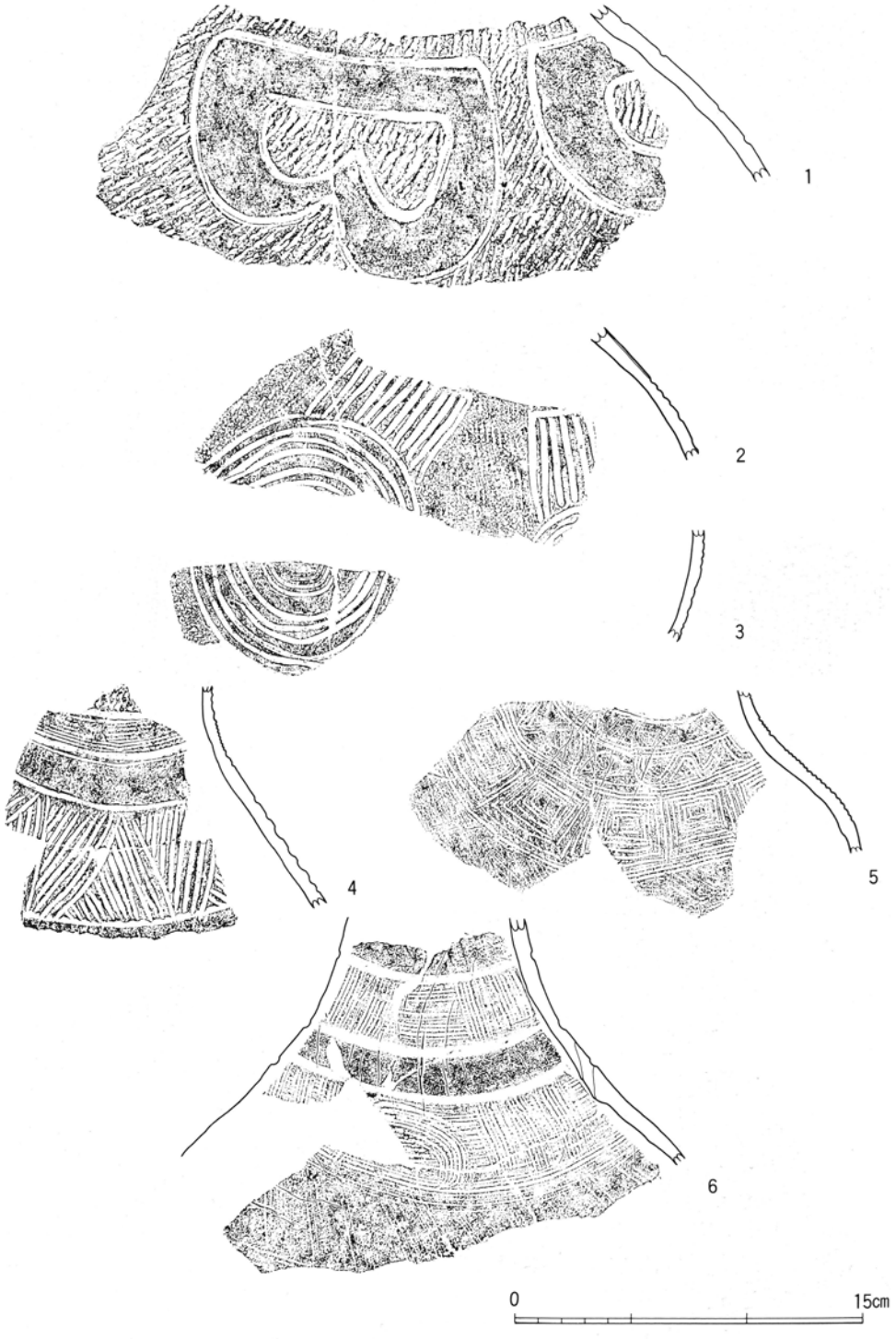
第１図



第２図



第3図



第4図

図版番号	実測図番号	出土地点	器種	残存部 部分名	残存部 口径	胎土	焼成	色調	形態・施文・技法
1－	1	I AS60B ⅦH 15b サブトレ	壺	口縁～頸	/	細石粒子を極多量に含む。2㎜程度の金雲母片が顕著。	良好	淡灰褐色	受口状口縁。口唇部：二枚貝の背面圧痕文。受口部外面：二枚貝による直線と連弧(←)、背面圧痕文。頸部外面：上半に、ヨコ～ナナメ(←)への、下半に、タテ(↑)への二枚貝条痕文。口縁内面ヨコナデ。
	2	I AS60B ⅦH 17a 検出Ⅱ	壺	口縁～頸	13.7	2㎜程度の細石粒子を極多量に含む。	普通	淡灰白橙色	受口状口縁。受口部外面：二枚貝によるヨコ(←)への条痕文。頸部外面：右上から左下へのハネアゲ文B。
	3	I AS60G ⅦG 18a 検出Ⅲ	壺	口縁	21.5	細石粒子を多く含む。	良好	淡灰黄色	受口状口縁。口唇部：二枚貝腹縁による押引き文(←)。受口部外面：下端を下方へ拡張し、粘土帯貼付後、指頭による押捺(↑)。二枚貝によるナナメ(↖)への条痕文(←)の後、二又工具による直線文。頸部外面：二枚貝によるヨコへの条痕文。頸部内面：二枚貝によるヨコ(→)への条痕文の後、二又工具のヘラ波状文(←)。
	4	I AS60G ⅦH 10t 検出Ⅰ	壺	口縁	17.8	細石粒子を極多量に含む。	良好	淡灰褐色	受口状口縁。口唇部：二枚貝腹縁による押引き文(←)。受口部外面：下端を下方へ拡張し、二枚貝によるヨコ(→)への条痕文の後、1本1単位の棒状浮文を貼付。頸部外面：二枚貝によるナナメへの条痕文の後、粘土帯を貼付し、指頭によりナデ気味に押捺(↑)。頸部内面：二枚貝によるヨコ(←)への条痕文の後、ヘラによる波状文(←)。
	5	I AS60B ⅦH 17a トレンチ	壺	口縁	28.5	〃	不良	淡灰黒褐色	受口状口縁。口唇部：ナナメ(↘)への短いクシ描直線文と、指頭単独圧痕。受口部外面：ナナメ(↘)への短いクシ描直線文の後、棒状浮文を貼付。頸部外面：二枚貝によるナナメ(↖)への条痕文(←)の後、粘土帯を貼付し、指頭によりナデ気味に押捺(↑)。頸部内面：二枚貝によるヨコへの条痕文の後、二又工具による山形文(←)。
	6	I AS60G ⅦF 17t 検出Ⅰ	壺	口縁～頸	13.9	5㎜前後の細石粒子を多量に含む。	良好	淡灰白黄色	受口状口縁。口唇部：両端を拡張、下方へ折り返した後、両端にヘラ側面による刻み。受口部外面：二又工具による流水文風の文様の後、下端にヘラ側面による刻みを行い、口唇部から頸部外面上半にかけて棒状浮文を貼付し、口唇部上部には、二枚貝背面圧痕、受口部上部と頸部外面上半上部には、指頭圧痕。頸部外面：二又工具による直線文(→)。
	7	I AS60G ⅦF 17t 検出Ⅰ	壺	口縁～頸	13.5	極微細な金雲母片を多く含む。砂分がやや多い。	良好	淡灰黄褐色	単純口縁。口唇部：二枚貝腹縁による押引き文(←)。口縁部外面：タテ～ナナメ(←)へのハネアゲ　C。口縁部内面：ヨコ(←)への二枚貝による条痕文。頸部外面：ヨコ(←)への二枚貝による条痕文。
	8	I AS60G ⅦH 16t 検出Ⅰ	壺	口縁	/	微細な金雲母・雲母片をやや多く含む。	良好	黄土色	単純口縁。口唇部：棒状工具側面による刻み。口縁部外面：口唇部直下に粘土帯を貼付した後、指頭による押捺。粘土帯より下方は、二枚貝による直線文(←)。
	9	I AS60B ⅦH 11a 検出Ⅱ	壺	口縁～肩	13.2	極微細な金雲母片を極めて多量に含む。	良好	淡灰褐色	単純口縁。口唇部：二枚貝腹縁による押引き文(←)。口縁部外面：二枚貝(?)によるハネアゲ文C(↑)。頸部外面：頸部以下肩部まで、ミガキ顕著。
	10	I AS60G ⅦF 15S	壺	口縁～頸	10.1	極微細な金雲母・雲母片を極めて多量に含む。砂分がやや多い。	良好	淡灰黒褐色	単純口縁。口縁部外面：口唇部直下に粘土帯を貼付した後、板状工具によるD字の刻み(←)。粘土帯より下方は、ヘラによる羽状文(①↓・←)。頸部外面：口縁部外面にひき続き、ヘラによる羽状文(②↓，③↓，④↓)。全部で4段ある羽状文の施文順序は、上段から順になっており、①→②→③→④。
	11	I AS60G ⅦG 18b サブトレ	壺	口縁	18.2	細石粒子を極多量に含む。	普通	淡灰白橙色	口縁部外面を四角く肥厚させ、肥厚部分の下端を下方へ拡張し、内側へ折り返す。口唇部：二枚貝による直線文(→)。内側口唇端は内側へ肥厚させた上で、内外側口唇端とも、丸棒状工具側面による刻み。口縁部外面：肥厚部分下端に、丸棒状工具側面による刻み。肥厚部分より下方は、二枚貝による直線文(→)。
	12	I AS60A ⅦI 10d 検出Ⅳ 下層・貝層	壺	頸～肩	/	細石粒子を極多量に含む。	普通	淡黒灰色 ＼ 淡灰褐色	頸部外面：以下肩部外面にかけ、クシによる施文。文様構成は上方より、ヨコ(←)への条痕文→ハネアゲ文C(↓)→ヨコへの条痕文。土器内面に黒斑あり。
2－	1	I AS60G ⅦG 18C 検出Ⅲ	壺	口縁	/	石英細石粒子が顕著。微細な金雲母片を少量含む。	良好	淡灰白橙色	単純口縁。口唇部：中央に棒状工具側面による沈線を1本めぐらした後、内・外とも口唇端に先端の丸い棒状工具による刻み。内側口唇端を拡張・肥厚させ、三角様の突起を形成。口縁部内面：棒状工具による沈線文を、三角様の突起の下で対向するように配置。
	2	I AS60A ⅦI 12a 検出Ⅴ 基盤直上	壺	口縁～頸	20 .9	細石粒子を多く含む。	良好	淡灰黄土色	単純口縁。口唇部：以下口縁部内面を経て、頸部内面上まで全面に、クシによる刺突(→)。外側口唇端に沿ってスス付着。口唇部外面：ハケによる調整。頸部外面：ハケ調整の後、クシ描直線文(←)。頸部内面：クシ描直線文。

図版番号	実測図番号	出土地点	器種	残存部 部分名	残存部 口径	胎土	焼成	色調	形態・施文・技法
	3	Ⅰ AS60G ⅦG 16 t サブトレ	壺	口縁～頸	/	〃	普通	淡灰白色	袋状口縁。口縁部外面：断面U字状の工具による3段にわたるナナメ(①↘，②↙，③↘)への短線文。その下に同工具による刺突文。頸部外面：断面U字状の工具による沈線を1本めぐらす。沈線以下赤彩。口縁部内面：赤彩
	4	Ⅰ AS60A ⅦⅠ 10 e 検出Ⅳ 貝層	壺	口縁～体上	9.8	微細な金雲母片を含む。	良好	灰黒褐色	単純口縁。口唇部：外側口唇端に、ヘラによるD字の刻み。口縁部外面：ヘラナデ顕著。又、頸部外面にかけ、板ナデ顕著。口縁部内面：以下体部上半まで板ナデ顕著。頸部外面：ヘラによる4本の沈線(←)。頸部内面：シボリ痕あり。肩部外面：以下体部上半にかけ、ヘラによる3段の羽状文(①↗・←，②↖，③↘)。
	5	Ⅰ AS60B ⅦH 15 b サブトレ	深鉢	口縁～頸	23.1	5㎜前後の細石粒子を少量含む。	良好	黒色	単純口縁。口縁部外面：クシによるタテ(↓)への条痕文。口縁部内面：クシによる押引き文(→)。その際の指頭圧痕が口縁部外面口唇端近くに見られる。頸部外面：クシによるヨコ(→)への条痕文。全体の施文順序は下から上。
	6	Ⅰ AS60G ⅦⅠ 17 a 検出	甕	口縁～頸	18.2	細石粒子を多く含む。	普通	淡灰白色	単純口縁。口唇部：クシによる刺突文(→)。口縁部外面：クシによるタテ(↓)への条痕文。口縁部内面：クシによる不整た波状文(→)の後、内側口唇端直下に2個1単位の粘土粒貼付。頸部外面：やや幅広いクシによる流水文の後、頸部最上部に、内側粘土粒と同位置に、2個1単位の粘土粒貼付。
3－	1	Ⅰ AS60G ⅦG 18 b 検出Ⅲ	壺	肩～体上	/	細石粒子を極多量に含む。	普通	淡灰白橙色	肩部外面：以下体部上半まで二枚貝による条痕文。後、ヘラによる環状弧文。弧文内部に、二枚貝による弧文が見られるが、充填か否かは不明。
	2	Ⅰ AS60B ⅦH 17 a 検出Ⅱ	壺	頸～肩	/	2㎜前後の細石粒子を多く含む。	良好	灰橙褐色	頸部外面：頸部最下部に、ヘラによる沈線を1本めぐらす。頸部内面：以下肩部まで、板ナデ顕著。肩部外面：二枚貝による直線文(→)の後、断面U字状の工具による文様を重ねる。
	3	Ⅰ AS60B ⅦH 16 a 検出Ⅱ	壺	肩～体	/	極微細な金雲母・雲母片を含む。	良好	灰黒褐色	形態は、大地形壺に類似。肩部外面：最上部にヘラによる沈線が現状で2本、その下に、二又工具による波状文を4列置く。体部外面：体部最大径のやや上に、二又工具による直線文を施し、最大径以下に、同工具による幾何学風の文様を施す。
	4 5 6	Ⅰ AS60G ⅦG 17a 検出Ⅱ ・ 16 a 検出Ⅱ ・ 16 b 検出Ⅲ	壺	頸～肩 肩～体上 体上	/	極微細な金雲母片を多く含む。	良好	淡灰黄土色	頸部外面：以下肩部にかけて、二又工具の背面によるタテ(↓)への2本の沈線の間にヨコ(←)への沈線を充填。頸部内面：板ナデ。肩部外面：二又工具の背面によりヨコへの沈線を1本めぐらし、その下に、同工具によりタテ(↓)への短線文。肩部内面：板ナデ。体部上半外面：肩部短線文に続き、クシによる条痕の後、その上に二又工具の背面によるヨコへの沈線を1本、やや離れてヘラによるヨコへの沈線を1本施し、その間にヘラによる連弧文を置き、連弧文間を、二又工具の背面による重弧文で充填。連弧文の内側に、同工具による短線文(↙)を弧に沿って置く。やや離れて、ヘラによる二重の連弧文を施し、より内側の連弧文の上下を、二又工具の背面による短線文が取り巻く。上の短線文の施文は(↗)、下の短線文の施文は(　)。連弧文間は、重弧文で充填。連弧文より下方には、地のクシによるヨコ・タテへの条痕が見られる。体部上半内面：板ナデ。
	7 8	Ⅰ AS60A ⅦⅠ 10 t 検出Ⅴ 貝田町層も含む	壺	頸～体上	/	細石粒子を多く含む。	良好	淡灰黒褐色	頸部外面：最下部に、ヘラによるヨコ(→)への沈線を現状で一本めぐらし、その直下に、ヘラによる平坦な刺突文(→)。体部上半外面：管状工具による刺突文(→)の後、その直下に、ヘラによるヨコ(→)への短線文、3本のヨコ(←)への沈線の順で置く。体部上半内面：板ナデ。
	9	Ⅰ AS60F ⅦG 17 f 検出Ⅱ	壺	頸～体上	(頸) 14.1	5㎜前後の石英細石粒子、極微細な金雲母・雲母片を多く含む。	良好	淡赤褐色	頸部外面：二枚貝による直線文(←)の後、肩部外面文様帯との区画として、ヘラによるヨコへの沈線を1本めぐらし、その後、ヘラによるタテ(↓)への直線交。頸部内面：以下内両に板ナデナデ顕著底部部外面：ヘラによるタテへの直線文の後、ヘラによるヨコへの直線文を充填。体部上半外面：頸部外面に同じ。但し、沈線は現状では見られない。全体の施文順序は、頸部・体部上半外面文様帯→肩部外面文様帯。
	10 11	Ⅰ AS60B ⅦH 11C 検出Ⅱ	壺	肩～体上	/	極微細な金雲母片を含む。	良好	/	肩部外面：断面U字状工具によりヨコへの沈線を一本めぐらす。体部上半外面：同工具により、山形曲線文を二重に施す。沈線部分を除き、肩部外面以下全面を赤彩。
	12	Ⅰ AS60F ⅦG 17 d 検出Ⅱ	壺	頸～体上	(頸) 5.3	微細な雲母・金雲母片を含む。		灰黒色	頸部外面：地に、クシによる条痕が肩部まで見られる。その後、ナデ調整し、断面U字状工具によるヨコ(←)への沈線を肩部にかけて4本めぐらし、続いて、断面平坦な工具によりヨコ(→)への沈線を1本めぐらす。頸部内面：以下肩部にかけ、体部上半内面と異なり、粘土乾燥が十分でなかったと思われる。体部上半外面：断面平坦な工具によりタテ(↓)への直線文を4本施した後、直線文間を、断面U字状工具によりヨコ(→)への直線文を充填。

図版番号	実測図番号	出土地点	器種	残存部 部分名	残存部 口径	胎土	焼成	色調	形態・施文・技法
	13	I AS60F Ⅶ G 15・16 d 検出Ⅱ・検出Ⅲ	壺	頸～体上	/	細石粒子を多く含む。	良好	淡灰橙褐色	頸部外面：以下肩部にかかる辺りまで、二又工具による直線文(←)。肩部外面：以下体部にかけて、同工具による鋸歯文(↓・→)。本部上半外面：鋸歯文の後、再び、同工具による直線文(←)。全体の施文順序は、直線文→鋸歯文。
4－	1	I AS60G Ⅶ G 16 b 検出Ⅲ	壺	体上	/	〃	良好	淡灰黄土色	外面：ナデ調整の後、ヘラによるヨコB字型の文様を施し、内外に二枚貝背面圧痕を充填。内面：板ナデ。内外面とも、黒斑が見られる。
	2 3	I AS60G Ⅶ G 15・16 a 検出Ⅲ	壺	肩～胴上	/	〃	良好	淡灰黄土色	肩部外面：最上部に、断面U字状工具により現状で沈線を1本めぐらす。その下に、同工具によりコの字型に区画した中をタテ(↓)への直線文で充填した文様を置き、その文様の外を二枚貝背面圧痕で満たす。肩部内面：体部上半と異なり、粘土乾燥が十分でなかったと思われる。体部上半外面：肩部コの字型文様に連結させ、同心円状の文様を同工具により施し、文様以外は、肩部と同様、二枚貝背面圧痕。全体の施文順序は、沈線・同心円状文→コの字型とその内側の充填→二枚貝背面圧痕。
	4	I AS60B Ⅶ H 15 b サブトレ	壺	頸～体上	/	〃	良好	灰黒褐色	頸部外面：ナデ調整の後、二枚貝腹縁による刺突文。その下に、クシ描直線文を置き、その上下をヘラによるヨコへの沈線で区画。肩部外面：以下体部上半にかけ、ヘラによるヨコへの沈線を2本めぐらし、その間を同工具による鋸歯文(↑・→)で充填。外面に黒斑あり。
	5	I AS60A Ⅶ I 11 c 検出Ⅳ 貝層Ⅳ	壺	頸～体上	/	5㎜前後の細石粒子を多量に含む。	良好	灰黒色	頸部外面：3本歯のクシによる直線文を肩部にかけて、3段施す。肩部外面：同工具によりクシ描直線文間を波線文で充填。体部上半外面：最大径付近に、もう1段クシ描直線文を置き、3段目のものとの間に、ヘラによる重方形文を充填。最大径部分に、クシによる条痕(?)が見られる。波線文は、(→)に施文。
	6	I AS 60B Ⅶ H 15 a 検出Ⅱ	壺	頸～体上	/	細石粒子を多く含む。極微細な金雲母片を多く含む。	普通	灰黒色	頸部外面：ナデ調整の後、クシ描直線文を施し、クシ描縦直線文を置く。その後、クシ描文の上下を断面U字状工具による沈線で区画。肩部外面：以下体部上半にかけ、肩部と同様に施文。但し、沈線区画は、上側の1本のみで、さらに、クシ描弧線文が加えられている。クシ描文様帯以下の地は、クシによる条痕。クシ描直線文は、(←)、クシ描縦線文は、(↓)、沈線は、(←)に施す。

(安部かえで作成)

参考文献・引用文献
愛知県教育委員会『環状2号線関係　朝日遺跡群第一次調査報告書』1975。
愛知県教育委員会『朝日遺跡』1982。
石黒立人　『阿弥陀寺遺跡出土の中期弥生土器について－2』『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ－昭和59年度－』財団法人愛知県教育サービスセンター　1985。
石黒立人　「勝川遺跡出土の弥生土器について」『勝川』財団法人愛知県教育サービスセンター　1984。
石黒立人　「伊勢湾周辺の中期弥生土器に関する覚書'86」『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器　1986、11、29　30』群馬県考古学談話会他。